

## 2. 太宰府市の自然、歴史、社会

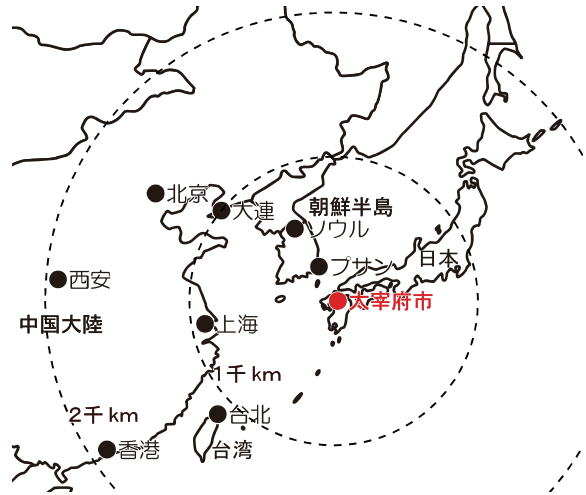
本市は、将来像に「歴史とみどり豊かな文化のまち」を掲げています。豊かな自然と歴史の存在と、それらを守り、育むまちづくりの推進を目指しています。

ここでは、本市の自然環境、歴史の変遷、歴史・景観まちづくりの動向を含めた社会情勢を概観します。

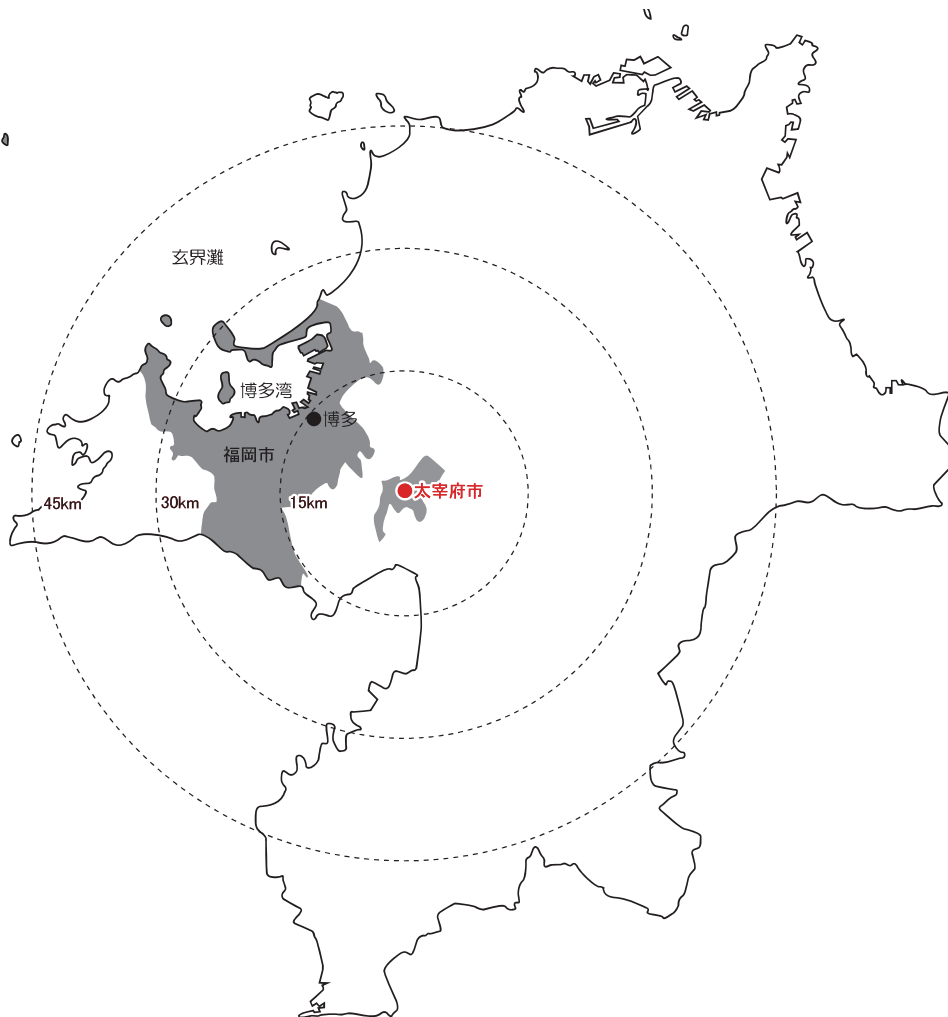
### 2-1 自然環境

#### (1) 位置

本市は、日本列島の九州地方の福岡県に所在し県内の中西部の筑紫地域に属します。広域的には東シナ海を挟んで中国本土、玄界灘を挟んで朝鮮半島を臨みます。古来より大陸や朝鮮半島との交流の窓口としての役割を担った博多湾の内陸約15kmに位置しています。このような立地条件は、日本史、そして世界史に位置づけられる古代大宰府の背景になっていると考えられます。



◆アジアにおける本市の位置

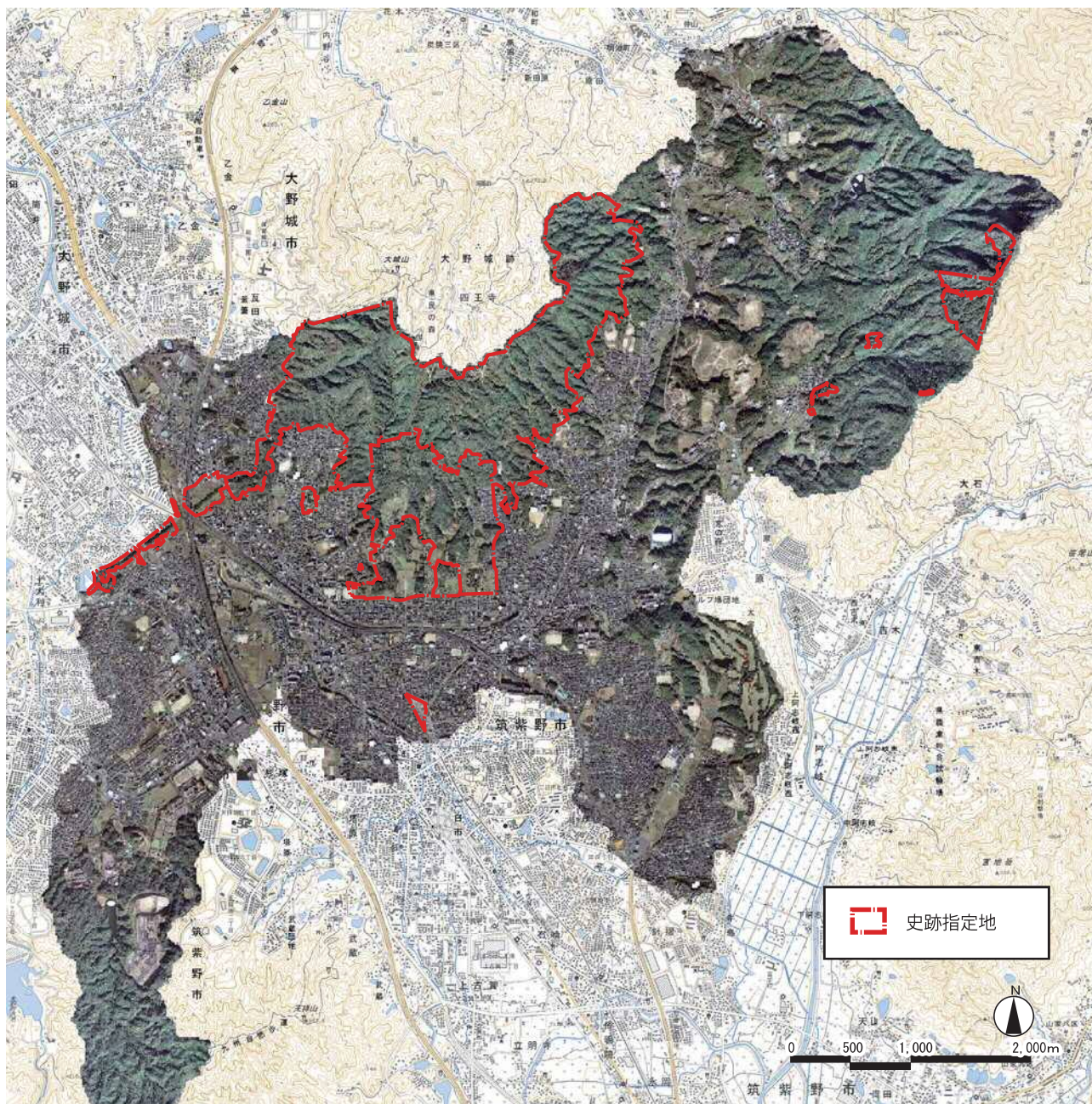


◆福岡県における本市の位置

## (2) 地形

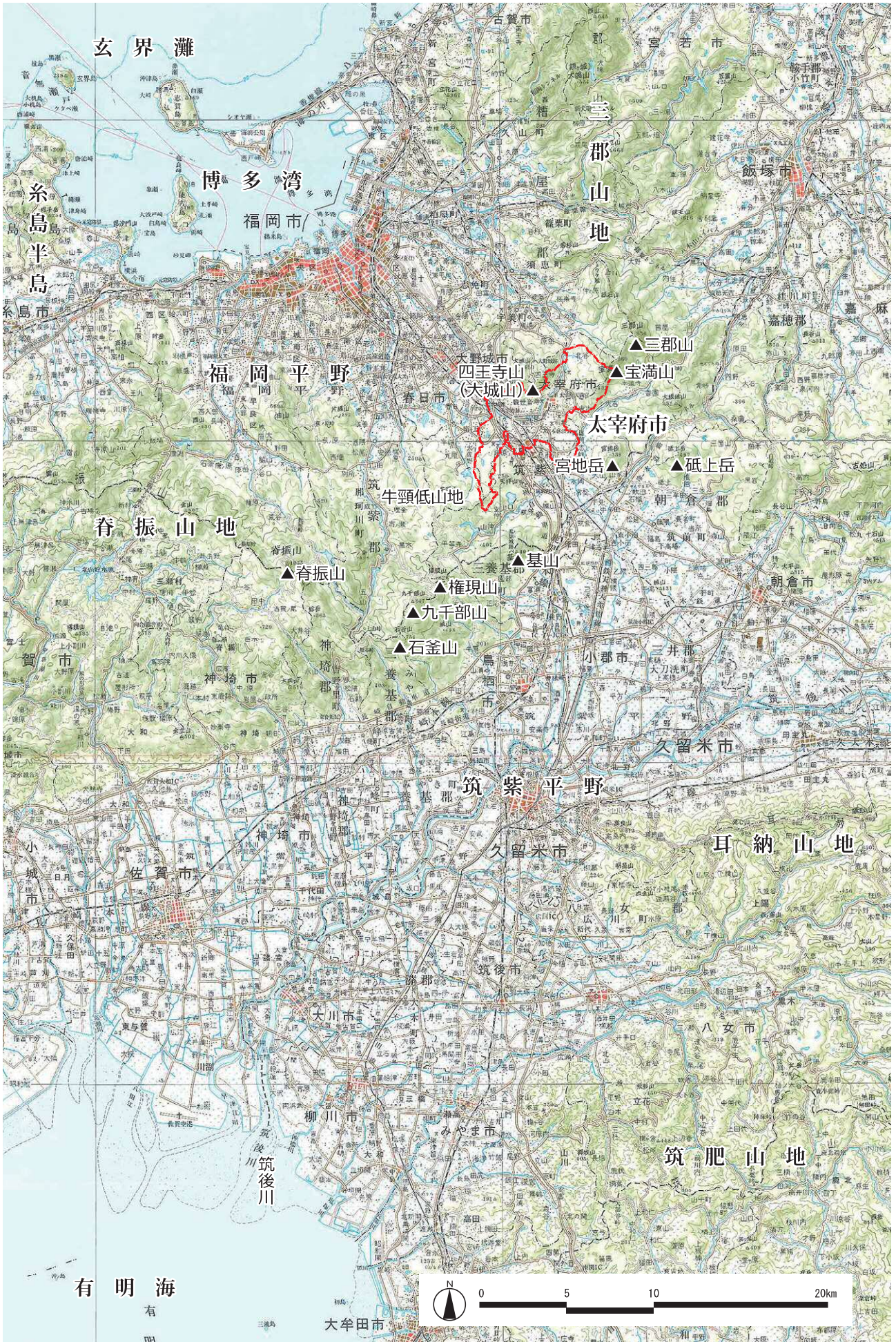
本市は、山地と平野で構成された地形的に起伏豊かなところです。市域は、北に四王寺山（最高点 410m）、東に高雄丘陵をはじめ愛獄山から宝満山（829m）へと連なる三郡山地があり、西には脊振山地の前山となる牛頸低山地（最高点 333m）が控えています。これらの山々の谷筋に位置するところに二日市低地帯と呼ばれる平野が広がります。この平野は福岡平野の南東部の奥にあたり、山々に挟まれた狭い平野が展開し、筑紫平野に抜ける回廊のようになっています。この回廊状の平野は、博多湾方面と有明海方面を結ぶ大動脈であるとともに、周辺からの交通が結束する交通の結合点でもありました。また、大宰府が置かれた場所は、海から攻められることを予想して、博多湾からも有明海からも離れた内陸におかれており、防衛上の要所を選んでいたことが推定されます。

大宰府関連史跡は、宝満山と大宰府跡の一部（客館跡）を除き、大宰府跡、大野城跡、水城跡、観世音寺境内及び子院跡、筑前国分寺跡、国分瓦窯跡、大宰府学校院跡が四王寺山の麓に位置しています。



### ◆地形

(背景には国土地理院発行 25000 分の 1 地形図「福岡南部」「太宰府」「不入道」「二日市」を使用)

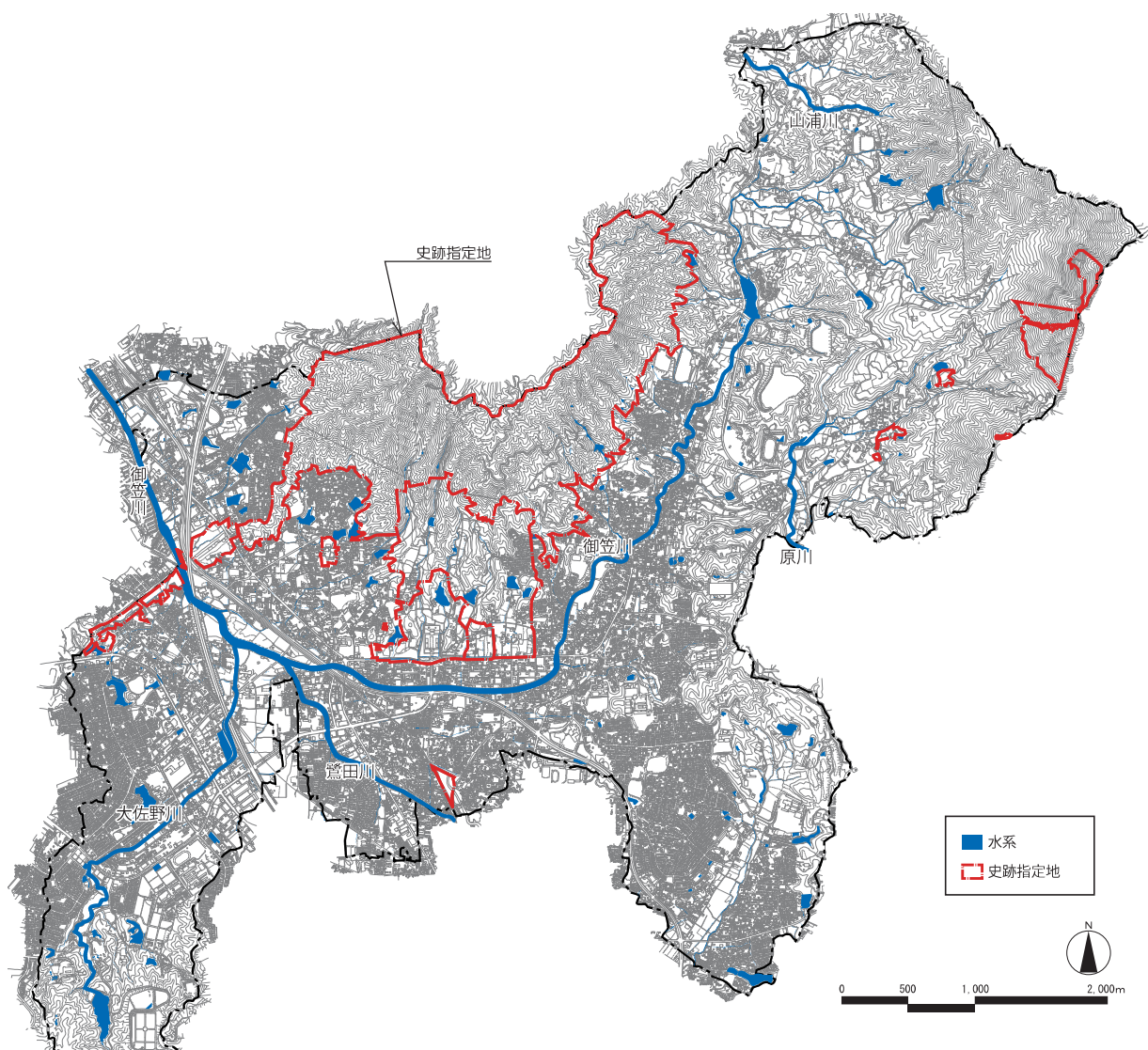


◆地形（広域）  
 （背景には国土地理院発行 20 万分の 1 地形図「福岡」「熊本」を使用）

### (3) 水系

市域の大部分は宝満山を起点として博多湾に注ぐ御笠川とその支流である鷺田川や大佐野ダム上流を起点とする大佐野川で構成される御笠川水系です。その他の河川としては、博多湾に注ぐ多々良川水系の山浦川、宝満川を経て筑後川から有明海に注ぐ筑後川水系の原川があります。これらの河川は、福岡平野、糟屋平野、筑後平野北部地域に注いでいることから、古来より四王寺山や宝満山は「水配の山」と呼ばれてきました。太宰府の地は北部九州の水源地の要と位置づけられます。

太宰府関連史跡との関係では、御笠川が水城跡を貫通することや、御笠川や宝満川が宝満山を水源としていることがあげられます。一方、四王寺山の麓には史跡指定地内外にわたり多くのため池が築かれており、そこから流れる水路が御笠川に合流しています。



◆水系

### (4) 気候

本市は、年間を通じて、気候の穏やかなところ です。

気候は、北部九州から山口県にかけて分布する日本海型気候区に属します。但し、内陸型気候区に隣接しているため、福岡市などの沿岸部と比べると、年平均気温（16.1℃）は低めですが、夏季の最高気温（36.0℃）は高めになっています。年間の降水量は約1,500mmで沿岸部より多い傾向です。

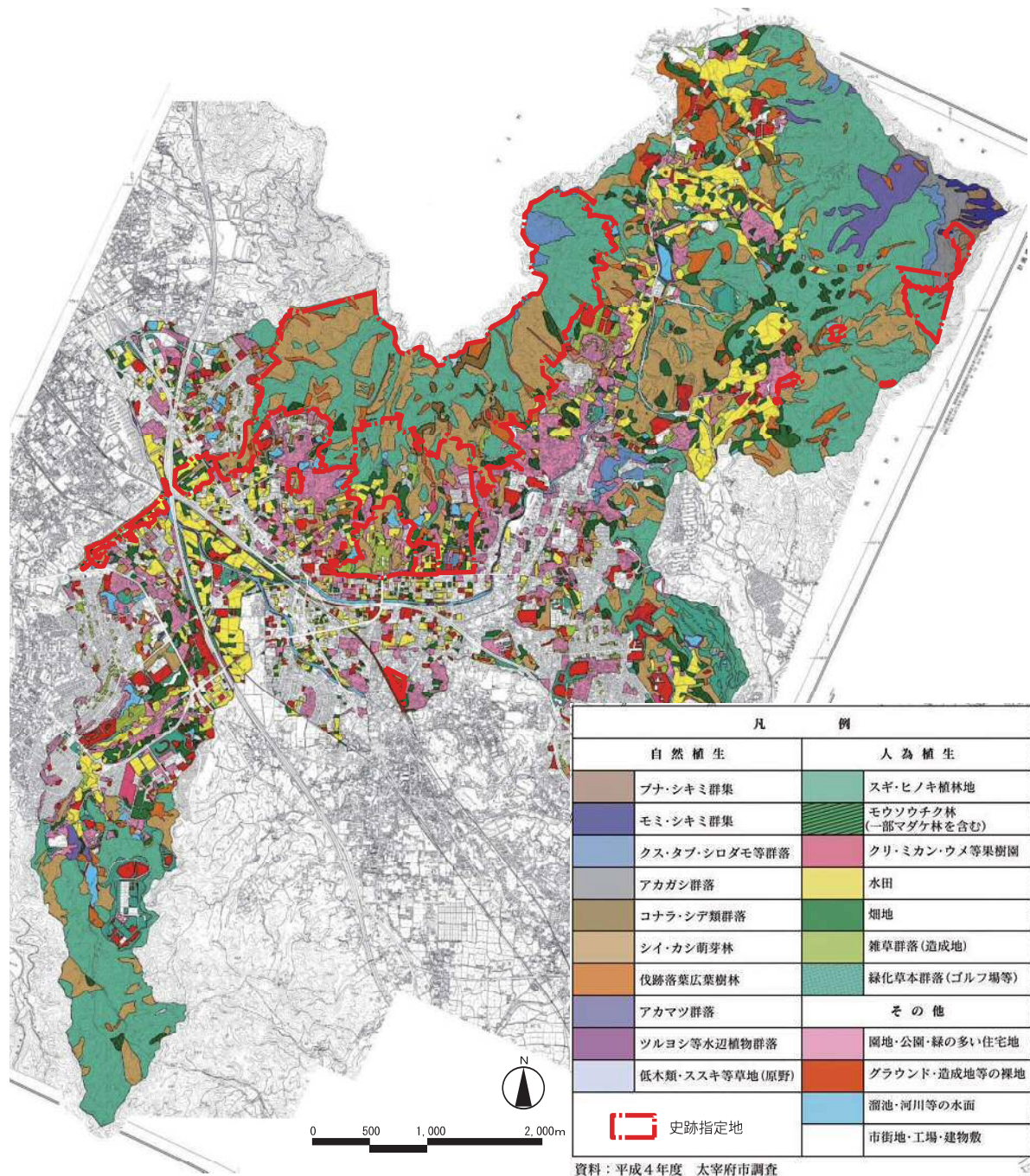
## (5) 植生

本市の植生は、昔から人の手が入り続けており、その代表的なものが草地と雑木林からなる里山や造林された人工林です。

里山は、コナラ・シイ・カシ等が群落を形成するかつての薪炭林で、四王寺山、水城跡、宝満山の麓にも存在します。人工林は、多くがスギ・ヒノキの植林地で緑の濃い森林となっています。

これら里山や人工林は、手入れが不十分な状況となっています。近年、低地から丘陵にかけては孟宗竹が侵入している場所も増えています。

他方、天然性林はわずかですが、ブナ、モミ、アカガシを主体とした照葉樹林体が宝満山周辺の標高約 700 m以上のところに残されています。



### ◆植生

## 2-2 歴史的変遷

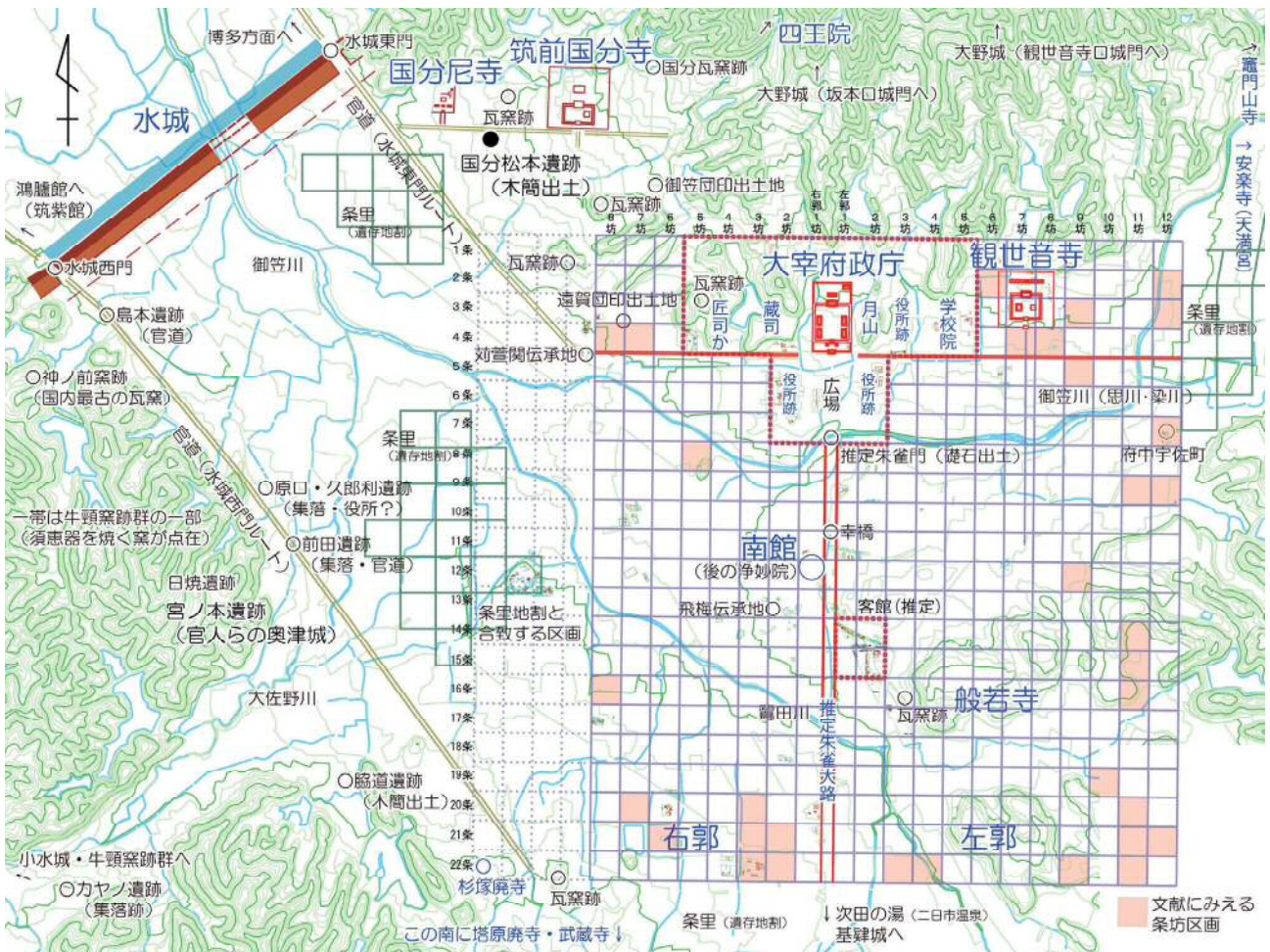
### (1) 古代

大宰府は古代の律令制下最大の地方官庁です。大宰府長官である帥が従三位という高い位階を持つことからその重要性が指摘されています。

大宰府が果たした主な役割は、外交（対外的機能）、軍事（軍団、防人の統括）、西海道の内政管轄（国司・郡司等の官人の任命権、公文勘会制、大宰府学校の存在、西海道諸国からの税をいったん大宰府へ貢進する）の3つといわれています。大宰府の対外的機能として、蕃客（外国使節の管理・監督）、帰化（帰化志願者の管理・監督）、饗讌（外国使節に対する饗宴）があげられます。当時の外交の舞台としての都市整備については、調査成果による条坊の復元や条坊内での客館跡の発見など新しい資料が提示されています。

大宰府の中心施設であった大宰府政庁は発掘調査により、Ⅰ～Ⅲ期の大きく3段階の変遷が確認されています。Ⅰ期は7世紀後半、Ⅱ期は8世紀初め頃、Ⅲ期は、10世紀後半に再建され、11世紀後半まで存続したと考えられています。政庁は都城と同じく朝堂院形式を採用していました。また、政庁から南へは、大宰府条坊跡と呼ばれる方形の区画をもつ条坊制が施工されており、都市設計に基づいた都市が広がっていました。奈良時代の史料である『続日本紀』では大宰府について、「この府は人物殷繁にして、天下の一都会なり」とあり、国内外から多くの人や物が集まり賑わっている様子を伝えています。

政庁の背後には四王寺山（大城山）があり、その山中には朝鮮式山城の大野城が築かれています。北西には山と山の間の狭い平野部を塞ぐように全長1.2kmの水城が、南には基肆城が築かれ、大宰府を中心にして取り囲むように防衛施設が配置されています。



◆古代の大宰府推定復元図（まるごと太宰府歴史展図録から転載（一部改変））

大宰府は政治だけでなく仏教を中心とした文化の中心地でもありました。天皇に由来を持つ観世音寺と般若寺を除いて、基本的に寺院は条坊の外側に配置されています。「府の大寺」と呼ばれた観世音寺は政庁の東側に位置し、西海道を代表する大寺として伽藍を構えていました。他にも筑前国分寺、筑前国分尼寺、四王寺（院）、竈門山寺（大山寺・内山寺・有智山寺）、塚原廃寺、杉塚廃寺、般若寺、安楽寺、原山（原八坊）、浄妙寺、武蔵寺等多くの寺院がありました。これらの寺院では国家安全の祈りのほか、竈門山寺での遣唐使などの航海の安全祈願といった大陸に近い大宰府ならではのものもありました。

また、大宰府は筑前国に所在しますが、筑前国と大宰府の関係は養老職員令大宰府条に「筑前国を帯す」とあり、緊密な関係が考えられています。

このように、大宰府は西海道内においては朝廷ともいえる存在であり、海外と日本を結ぶ玄関口として、またアジアとの交流の場としての重要な意味を持っていました。

## （2）中世

太宰府には、鎌倉時代、大宰府機構（朝廷側）にくわえ宰府守護所（幕府側）が置かれるなどその政治的重要性は続いていきます。政治の中心は政庁付近から観世音寺周辺へと移っていきます。観世音寺の東にあたる御所ノ内地区には、大規模に造成された区画があり、その区画では他地域と異なる優品が出土することから、ここが長く太宰府を支配した武藤（少弐）氏の「宰府守護所」と推定されています。鎮西奉行になった武藤資頼は大宰府機構を掌握しますが、13世紀後半には蒙古襲来や岩戸合戦が起こり、少弐氏の勢力は徐々に衰えていきます。同時に北条氏得宗の勢力が九州でも広がり、博多に鎮西探題が置かれることで太宰府の政治的な重要性の低下が始まります。南北朝期には、建武新政府・少弐氏・一色氏・足利直冬・宮方・今川了俊など多くの勢力が太宰府に入り、動乱の時代が始まりました。その後、室町時代になると鎌倉時代以来の太宰府の支配者だった少弐氏が没落し、大内氏が筑前を押さえて守護となり太宰府を治めます。戦国時代になり大内氏が滅亡した後は、太宰府は大友氏が治めていました。この時期、四王寺山に岩屋城、宝満山に宝満城が置かれ、郡代・城督が配備されました。太宰府はしばしば戦闘の舞台となり、とくに戦国時代末期、大友氏に対して九州制圧をめざす島津氏による岩屋城攻めは大規模な戦闘で、多くの寺院等は焼失し、太宰府のまちは荒廃してしまいました。

安楽寺（天満宮安楽寺）や観世音寺などは、多くの子院や荘園をかかえる中世寺院へと変化しました。数多くの学問僧や留学僧、聖（民間宗教者）等が活動し、禅宗・律宗・時宗等、さまざまな宗派の寺院が建立されています。主な寺院だけでも天台宗の安楽寺（太宰府天満宮）・観世音寺・大山寺（宝満山）、禅宗の崇福寺（横嶽）が挙げられ、四王寺山や宝満山の麓に多くの寺院が建てられました。鎌倉時代末期の宝満山中には巨岩に梵字を彫るものが認められ、この時期から山中に修験道が入ってきたことを示しています。中世には太宰府での宗教活動が盛んになり、太宰府が宗教都市としても重要な位置を占めたことがわかります。

他方、文明12（1480）年に書かれた宗祇の「筑紫道記」には、大宰府関連史跡が廃墟として登場します。水城跡も天智天皇の時代のものであり、まるで横たわる山のように記されています。このことは、室町時代には既に古代大宰府の遺跡が人々に認知されていたことを物語っています。

### (3) 近世

長い戦乱が終わり、近世の太宰府は、福岡藩領の御笠郡に属し、平地部のほぼ全域が農村地帯になっています。黒田長政が慶長7（1602）年に実施した検地の結果を記した「慶長年中調各村別国高帳」には、北谷村、内山村、宰府村、観世音寺村、片野村、通古賀村、坂本村、水城村、国分村、吉松村、向佐野村、大佐野村の名が記されています。

他方、宰府宿は藩の宿場町と認められ、長崎街道や日田街道と太宰府天満宮を結ぶ参詣道が整備されています。太宰府天満宮へ参詣するとともに、周辺の名所や旧跡を巡る参詣旅行が庶民の娯楽に定着していきます。これが「さいふまいり」と呼ばれるもので、天神信仰の広がりにもあって、全国各地から太宰府天満宮に参詣者が訪れるようになりました。

さいふまいりの様子については、江戸時代に数多く書かれた紀行文に記されています。その中には参詣者が天満宮を訪れた後に足を運んだ名所旧跡として「都府楼跡」、「観世音寺」、「戒壇院」、「水城跡」、「苜萱の関」、「榎社」等が記されています。古代大宰府の遺跡が物見遊山の名所としても親しまれていた様子が窺えます。

なお、1688年、福岡藩に「筑前国続風土記」の編纂を命じられた貝原益軒は、「太宰府旧址」、「都府楼址」、「学業院址」等について記述しています。また、福岡藩は寛政5（1793）年と文政3（1820）年に2回の礎石調査を実施し、都府楼跡等の礎石の移動を禁止しています。これらは、古代大宰府の遺跡に関する調査研究や保存に向けた取り組みが江戸時代にはじまったことを物語る出来事です。



◆大野城太宰府旧蹟全図北 市指定文化財 文化3（1806）年（個人蔵、大宰府跡周辺部）



## (4) 近代

明治時代となり、明治政府が打ち出した政策により太宰府天満宮と門前、そして宝満山が大きな影響を受けました。神仏分離により、安楽寺天満宮は太宰府神社となり、仏教関係のものは取り払われました。社僧の多くは神社を離れ、山上（三条）の原山（原八坊）に起源をもつ僧坊は解体していきます。他方、宝満山は中世より修験道の山として栄えて来ましたが、明治5(1872)年に布告された「修験道禁止令」にともない、山伏は山を下ることを余儀なくされました。一方、平野部に広がる農村地帯一帯については、明治になっても、近世の頃と大きな変化もなく、戦後まで農村集落としての姿を維持しています。

明治期に入って、近代的手法を用いた遺跡の調査・研究が進展したこともあり、遺跡保存に対する重要性が高まっています。大正8(1919)年の「史蹟名勝天然紀念物保存法」の施行後まもなく史跡指定が始まります。

## (5) 現代

昭和25(1950)年「文化財保護法」の施行後まもなく、昭和28(1953)年には大宰府跡、水城跡、大野城跡が国の特別史跡になっています。昭和30年代末には高度経済成長社会の影響から大宰府関連史跡を含む地域に開発の波が押し寄せ、大規模な宅地開発が急増しました。そのため地元では史跡保存のあり方をめぐって激しい議論が巻き起こりました。そんな中で始まった福岡県教育委員会による大宰府関連史跡の調査では、地元の人が発掘調査に参加することで、地元の住民にも遺跡のすばらしさについて理解を得ることができ、また調査の成果によって貴重な遺跡であることが広く公開されたことも、人々の理解につながりました。

昭和45(1970)年に特別史跡大宰府跡の追加指定並びに史跡大宰府学校院跡、観世音寺境内及び子院跡の新たな指定が告示されました。ここに全国に誇る大規模史跡としての指定に至り、その後現在に到るまで、地元住民の理解と協力により、追加指定や公有地拡張をはじめ史跡の保護が進められています。



◆多くの人々に親しまれる大宰府跡の様子